

---

# 悲哀人生

アルファ・レイ・ルシヴァム・リツァー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悲哀人生

### 【Nコード】

N2589BA

### 【作者名】

アルファ・レイ・ルシヴァム・リツァー

### 【あらすじ】

突然の別れ。減ってゆく触れ合い。嫌いな読書、欠かせない読書。

『僕』はこれからどんな悲しい人生を歩むのだろう。

小説力キコ様でも別のハンドルネームで投稿させていただきます。  
います。

## 悲しみはここから

突然のことだった。

両親が別れた。

その年、僕は小学校6年になった。通っていた学校では毎年入学式にクラス替えがあった、友達というよりも友人しかない僕はその年たった二人しかいなかった友人と違うクラスだった。

つまらなかつた。

年初めのころは、廊下でいつものように話していたがそれも1か月ほどで終わり、僕は会話が減った。

ゲーム好きだった僕はよりゲーム画面を見ている時間が増えた、それは家族との触れ合いすら減らしていった。

ゲームばかりの僕に母が渡してきたのは僕が好きなゲームの小説だった。本なんて読まない生活だったのに、読書は嫌いだったのに、学校生活にそれは欠かせなくなっていた。

修学旅行。というものがあつた。ただ、人ごみの中を歩き偶然同じクラスの人間と2日過ごした。それだけだった。

## 最初の終わり

何が楽しいんだろう？

どうして生きているんだろう？

答えのない自問自答の繰り返し。

読書ばかりになった学校生活。

教室に残される毎日。

いない存在。邪魔な存在。

・・・去年はなにしておごしたんだろう。

時間は流れ続ける。

そして、卒業という終わり。

無言冷静。勝手に作った4字熟語を卒業の寄せ書きに書いた。

否定したい造語。否定してほしい造語。

ただ、誰一人否定してはくれなかった。

冷静の静の字を清と間違えて書いたけど、誰も言うてはくれなかった。

静かに暮らしたい。田舎に行きたい。ノンビリとしていたい。

そんな嘘を本当のように書いた卒業文集。

本当は死にたいとか、そんなことを書くこととした卒業文集。

卒業式。

少しだけ泣いてしまったのは、最後まで何か欲しかったからだろうか。

## 光はそのとき

入学式。

どうせ何も変わらない。

このままでいい。

中学の入学式、制服のポケットには小説。

思ったことなんて、吹奏楽部に少し感動した。それだけ。

もちろんクラスは変わった。

去年離れた友人と同じクラスだった、ただ同じだけ。

もう、いつかのようにには話せない、たった1年だけでも僕は変わったのだから。変わってしまったのだから。

自己紹介なんて適当だった。覚えられる必要も覚える必要もないのだから。

ただ、自分が安全に暮らすためだけに一度だけ教室を見渡した。関わりたく人間とはだいたい1日もあればわかった。

長いあいさつが終われば中学も今までと同じ授業と放課の繰り返し。変わるのは教科と教室と教科書か小説か。

何も変わらず、何も変えないはずだった。それでもすぐに変わった。

だって、当然のことだったのだろう。僕を知らない人間にとって僕はただのクラスメイト。そして、クラスメイトとは会話するものだったのだろう。

その日、とても久しぶりに隣の席の生徒に声かけられた。

## 楽しさを見つけて

はじめましてとかよろしくとかじゃなくて、馴れ馴れしいことばだった。

久しぶりすぎる『誰か』からの言葉に僕はテキストに頷いた。

次の日も、その次の日も声をかけられ、気づけば会話していた。

「その本なに？」

「あ、ゲーム面白かったな」

昔みたいなお話だった。どうでもいいような、無価値だったような、ただの暇つぶしのための会話だった。

でも、そのときは違った。会話に価値があった、暇つぶしなんかじゃなくて、楽しいと感じた。

ある日のことだった。

いつの間にか、楽しいと思えるようになった学校生活の中で新しい友人が言った。

「よかったなあ。もっと暗いやつかと思ってたよ」

その言葉は、歴史上のどんな人物の言葉より僕の心に響いた。

そうなる予定だった。また、影のように過ごす生活が続くはずだった。

ただ、その言葉を聞いたその瞬間からそんな予定、そんな過去は消えた。

こんなに、人生って楽しかったんだ。と思った。

もう、この楽しさは失くしたくないと秘かに願っていた。

## 好意を抱いて

時間が止まる。そんなことが起きることなく僕の生きる時間、僕たちの時間は流れた、教室へ向かう足取りが少しづつ軽くなっていることに気づいて、どうしてか少しだけゆっくり歩いてみた。

ただ、昔みたいにつつむくことなく教室に入った、朝から会話で きることが嬉しかった。

読書の時間は減り、自作の短編小説を書くようになっていた、それも友人との話題になり授業中でも暇を見つけては書くようになっていた。

そして、きつかけなんてものはあまりに小さなものだった、『好意』について考えるようになった。

『好き』というより嫌っていたはずの人だった、それでも、僕は確実に好意を抱いた。

その人は、偶然席が近くて、偶然僕の小説を読んでくれて、その人が読んでくれたから異性と関わりのない僕が小説という間を持ってクラス全体と関わりを持てた。

けれど、そんなことはどうでもよくて、きつとあの人が「優しい」と言ってくれたから好きになってしまったんだと思う。

それも偶然あの人に定規を貸したから言ってくれただけかもしれない。でも、それはどこか『特別』な気がした。

「ありがとう」「じゃなくて「優しいね」と言ってくれる人はそれまでいなかった気がしたから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2589ba/>

---

悲哀人生

2012年1月15日01時49分発行